

---

**ドラッグ、ちくわ、コンセント、並行世界、うん、そんな感じ。**

シラカベヒロ氏

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラッグ、ちくわ、コンセント、並行世界、うん、そんな感じ。

### 【Zコード】

Z8873T

### 【作者名】

シラカベヒロ氏

### 【あらすじ】

SFってなんの略か知ってるか次ノ富。スケールファンパない、の略だ。  
pixivにも投稿。

学祭まで一週間切った月曜日。

僕が所属するSF研究会の、出し物の準備が佳境に入ってきた、と先輩が言い始めた頃。

友人の彼女が捕まつた。

捕まつた、っていうのはぶっちゃけて言つちゃえば逮捕されたってことで、じゃあなんで逮捕されたのか、ぶっちゃけて言つちゃえばドラッグだつた。一体なんのドラッグか。これは僕は知らない。と思ってたら、

「ヘロインだよ」

友人がぶっちゃけた。別に訊いてもなかつたし、ヘロインって名前は知つてるけど具体的にどういうやつなのかも知らないし、そもそもそんなこと教えられてもこっちとしてはなんて言葉をかけたらいいかわからなかつたので、

「おー、へえ、そう

と、おへその節目節目に長音を入れたような（よくなつていうかそのままだけど）、気の抜けた返事をしておいた。あと、全然どうでもいいことだけど、友人の彼女つまり言い換えれば友人のヒロインは、ヘロインをやつっちゃつて、ムショイン（務所IN）したんだな、とかぼんやり考えて面白くなさすぎて少し眠くなつた。

友人、遅村一郎は、特に落ち込んだような様子もなく、ただ黙々と僕の前でカレーを食べていた。

昼休みだつていうのに学食はわりと静かで人もまばらで、まーそりやあんまし美味しくないもんない、とか考えながら皿の前の、皿に半分以上残つたパスタ（べたべたしたナポリタン）をじつと見る。かれこれ十分ぐらいフォーク置きっぱなしだ僕。

前のテーブルに並んで座る女子の話し声が聞こえてくる。カップの飲み物を飲まされてる女子と、飲ませてる女子。

「落ち着いた？」

「うん、落ち着いた。ヘロインってすげーねー」「真野」

「うん、カフェインね耳岸。みみき」ヘロインもすげーだろうけどね確かにこの、カフェインとヘロインを言い間違えるつていう意図的なんだか天然なんだかわからぬどっちにしてもくだらないセリフ、今、遅村の前で言うのは不謹慎だろーと内心ひやひやする。けど、遅村はなんにも気にせず、黙々とカレーを食べ続けている。にしてもこれ、カレー、一回食べたことあるけど本気で美味しくなかった。キンヤンプで水入れすぎてダメんなったみたいな味、なのによく黙々食べられるな遅村、とわりどどうでもいい部分に対して感心した。

「俺もさ、警察に、調べられたんだ」

「え？」

なんにも訊いてないのに急に脈絡なく喋りだす遅村。スプーンを置き、僕のほうをまっすぐ見る。

「りづめ（遅村の彼女の名前らしい）がさ、ヘロインやつてたからさ、付き合つてた俺もあやしいってことでさ、うん、警察が、家に来て、家宅捜索つていうのかな、ついでに事情聴取もされて、うん、そんな感じ」

「へえ、そりゃ、はあ

だからそんなこと言われてもなんて返したらいいのかわからないし、その前に遅村、口元にカレールーがちょびつと付いててそればっかり気になっちゃって、僕は頭に話が半分くらいしか入ってきてない。そんなことお構いなしに喋る遅村。

「りづめはさ、なんていうか、ちょっと変わった子だったからもともと、だから、そのなんていうか、ドラッグやつてるとか全然思つてなくて俺、うん、そんな感じ」

「おう、はあ、ね」

『「うん、そんな感じ』で締めるのが遅村の中で流行つてんだろつか。

「とにかくさ、りづめはちょっと変わった子だったんだよ

「うん、うん」

「いい子なんだけど、変わってるっていうかね」

「なるほど、なるほど」

「変わってる、そう、変わってる子でさ、変わってる」

俄然おんなじことしか言わなくなつた遅村と見つめ合いながら、あれこれ、なんだろう、話聞いて欲しいのかな僕に、と氣づいて、正直そんなに興味なかつたけど、おそるおそる、

「あの方遅村、彼女、どんな風に変わったの」と尋ねると、遅村はすっと俯き、黙り込んだ。

えー。聞いて欲しいんじゃなかつたの。

思いつきり裏切られたような気分でずんと沈み込みながら、食べたくもないまいぱスタをつるつるすする」と数分後。

遅村がゆっくり顔を上げ、

「ちくわを植木鉢に挿して育ててた」

と、はつきり言つた。

えー。なんの話か全然わかんない。一瞬、失礼ながら、遅村もクスリやつてんじやないかと思つてしまつた。申し訳ない。で、ゆつくり、理解する。あ、今の彼女の話？ ということは、えなに、彼女が？ ちくわを植木鉢に？ エー。それ明らかに「変わってる」とかで片付けられるレベルじゃないだろ。キメてるだろ。と、頭の中でガンガン突っ込みを入れながら、でも顔には出さないように努める。

「ちくわをさ、植木鉢に挿して、土詰めた植木鉢に、にゅつて挿して、でそれに水やつて、育ててて、そういう鉢植えがベランダに十個くらいあつて」

「はあ、へえ」怖。

「あと、ちくわをさ、絶対カバンに一つ入れてたんだ、常に」

「えー、ふうん」怖。

「それから、ちくわをさ、夜寝る前に枕元に置いてた、これは二つ」「なるほど、なるほど」怖。

「あ、あと、ちくわをさ、兄貴だと思つてたみたいで、お兄ちゃんつて呼んでた」

「そつかあ、うん」「怖。

「それとさ、わりとさ、自分のことちくわだと思つてた」

「そりなんだ、へえ」「怖。

「で、ちくわを」どんだけちくわの話あるんだよ。ちくわ食べたくなってきたわ少し。軽く気持ち悪くなりながら、とりあえず話を変えようと試みる。

「まあでも、遅村さ、そのー、あんまり落ち込まないでさ、いや、落ち込んでない? っぽいけどさ、うん。まあ、なんかあつたら僕に、なんでも言つてよ、うん。相談乗るし、『話聞くし』

突然。「ばああっ」と遅村が大声を出した。えなに? おばけ屋敷の練習? と思つたら遅村は僕をまっすぐ見たまま泣いていた。

溢れる涙と溢れる鼻水。

「次ノ宮(僕の名前だ)、俺、次ノ宮、俺、次ノ宮、俺」

「あ、うん、うん。落ち着け遅村」

「俺、どうしたらいいか、もう、俺、うう、俺」

「うん、そうだね、うん、僕も、どうしたらいいか」

「次ノ宮、俺、りすめとまた一緒に……一緒に……うう、ちくわあ

「なんで最後ちくわつて言つたのかわからないけど、そう言つたつきり、遅村は突つ伏しちやつたもんだから、遅村はカレーの皿に顔突っガバッと突つ伏しちやつたもんだから、遅村はカレーの皿に顔突っ込んじやつて、でも構わずそのまま泣いていて、僕としてはもう本当にどうしたらいいかわからず、おろおろするしかなかつた。ああ、学食にあんまり人がいなくてよかった、と心底思つた。

\* \* \*

「そつか、それは災難だったなあ」

数メートルあるやたら長い銅線をくりくり指先で弄りつつ、狭い

SF研の部室内をうろついて歩き回りながら、トイさんが言つ。僕は、よいしょ、ヒパイプ椅子の上であぐらをかく。ちなみにSF研は、僕とトイさんの二人で全員だ。

「トイさん、『災難だつたなあ』って言いますけど、災難って誰がですか？ 僕ですか？ 遅村ですか？ 遅村の彼女ですか？」

「ヘロインという薬物があるこの世で生きていかなければならぬ我々人間全員が、だよ」

「スケールでかいですね」

「SFってなんの略か知ってるか次ノ宮。スケールファンパない、の略だ」

適当なことばっかりべらべら喋るトイさんを、少し尊敬した。

「よし、できた」

ねじねじにねじった細い銅線を、トイさんが僕に差し出した。

「え、なんですか」

「学祭の、出し物だ」

「……え、この銅線が」

「そうじやない。この銅線を使って、ある行動をして、やきそばを焼く」

まったくよくわからない。ので、

「よくわかりません」とそのままはっきり伝える。

トイさんは、はあ、と大げさに芝居がかつたため息をつく。

「よくわかりませんって次ノ宮、それはお前が全然活動に来ないのが悪い。自業自得極まれり」

「すみません最近バイト忙しくて」

「バイト忙しさ極まれり」

「今日からは毎日来ますんで」

「毎日来まり」

「あの、まれりはいいんで、学祭の出し物のこと詳しく述べてください」

トイさんはゆつくり頷くと、懐からペンを取り出しそうに勢いよくキヤ

ツプを外し、カカカカカカツと壁に大きく文字を書いた。

「これ、わかるか、次ノ宮、

「あのトイさんその前に、壁に文字書くのやめてください。いくら

ホワイトボードがないからって」

「ごめん極まり。……で、わかるか？」

パラレルワールド。うん。まあ、名前は知ってる。意味も、まあ、

なんとなくだけどおおよそ知ってる。

「並行世界、ですね？」

「そうだ、と大きく頷くトイさん。

「いいか次ノ宮。我々SF研の今回の出し物は、パラレルやきそばだ」

「すみません全然わからないです」

はああ、とまたしても芝居がかつたため息をつき、トイさんはがつくり肩を落とした。数秒の後、顔を上げ、僕を睨むように見つめる。

「次ノ宮、いいかよく聞け。並行世界 つまり、こことちつくりだけ少しだけ違う世界、に行くためにまじつすればいいと思つ。ヒントはこの銅線だ」

うわー。まったくわからない。わからないっていうが、そもそも僕あんまりその話に興味がない。SFでいえばタイムトラベル的な話が好きなので、パラレル的な話は正直どうでも。と思っていたら、僕が何か言う前にトイさんが勝手に喋り始めた。

「私はな次ノ宮、人は大きな身体的ショックを与えられることでパラレルワールドへ行けるのではないか、といつ理論に辿り着いたんだ」

「はあ、あの、もうちょっと詳しく説明してください」と、言つたのが間違いだった。

それから四時間。窓の外が真っ暗になるまで、トイさんは延々喋り続けた。壁は数式やら文字列やらで埋まり、真っ黒になった。そ

して、僕はほんとにパラレル的なことに興味なかつたので、それだけ喋られてもちつとも頭に入つてこなかつた。し、パラレル的な世界の存在をちつとも信じられなかつた。要するに、四時間無駄にした。

そんな僕の気持ちなんてつゆ知らず、ひとしきり喋り終え心地よさそうに一息ついたトイさんは、おもむろに僕の手をぎゅっと掴むと、銅線の先端を握らせた。

「というわけで次ノ宮、お前にはこれから、この銅線をコンセントに突っ込んでビリビリしてもらつ」「ひらつ

「え、何が」というわけで『かもわからないし、嫌です』

「そしてそのショックでパラレルワールドに行つてもひつ

「あの、嫌です」

「そしてパラレルワールドでやきそばを焼いてきてもひつ

「だから、嫌です。といふか、なんでやきそばですか

「ソウルフードだからだ。いいか次ノ宮。美味しいやきそばを制するものは学祭を制す。パラレルを制するものはSFを制す

とかなんとか喋りながら、トイさんは懐から白い手袋を取り出し、自分の手にはめた。そして僕に握らせた長い長い銅線の先っぽ、の逆側の先っぽを持つて、てくてく部屋の隅っこに向かつて歩いていく。隅っこに、壁に備えられたコンセント穴の前で立ち止り、僕を見る。

「次ノ宮、最後によく聞け。いいか。やきそばの材料は向こうで買ひ揃える。そしてその金は向こうの俺にもらえ。以上だ」「え

と、口に出すか出さないかのタイミングで僕の視界は、すうつとホワイトアウトした。えー。

\* \* \*

「……とこづ感じで、僕は今ここにいるんですけど……トイさん、

信じてもらえます?」

部室。

時間は昼。窓から日差しが射し込む。

そして、部室の壁は真っ白。

トイさんは僕をじっと見つめたまま、「ひくん?」と大きく首を傾げた。

「次ノ宮、じゃあお前、そのパラレル……なんたらとかいうのから来たってことか?」

「そうみたいですね。来たみたいですね、これ使って」

握った銅線の先っぽを左右に大きく振つてみせる。

トイさんは、その顔に明らかに困惑の色を見せる。

「でも次ノ宮、なんでお前、ここがその、パラなんとかだつてわかつたんだ」

「あ、それは簡単です。そこに僕がもう一人いるからです」「パイプ椅子にあぐらをかいて座り、僕を見る僕、を指差す僕。こじいりや」

「僕つてもう一人いたんだあ」

と、ぼんやり呟くこっちの世界の僕。リアクションはそれだけ。至つて平然としている。なんか僕、むかつくな、客観的に見ると。「しかし次ノ宮、なんでお前、その、パラなんとかレルだと、急にSFみたいなこと言い出したんだ」

「え? いや、だってSF研だから」

「え、なにが」

「え、ここが」

トイさんは沈黙して、こっちの世界の僕と目を合わせる。そして、ゆっくり口を開く。

「……うん、まあ、そうか。うん。確かに、SF研、と言えないこともないか」ほん、と小さく咳払いをして、「シマフクロウ研究部だからな、じい。略せば、SF研、か」

えー。

\* \* \*

「うか。つまり。うか。これがパラレルワールドなのか。  
部室を飛び出した僕は、あてもなくふらふら歩きながら、考えた。  
僕がいた世界とは、ちょっと違う、並行世界。

この世界では、トイさんはシマフクロウ研究会。なるほど。とい  
うかシマフクロウ研究会ってなんだよ。マニアックすぎるよ。ぶつ  
くさ脳内でぶーたれる。どうか、でもきっと、他にも何か元の世界  
と違うところがあるんだろうな、と考えながら歩きながら中庭に差し  
掛かり、ふいっとなにげなく空を見ると色が黄色かった。

「黄色！」

思わずそんまんま口に出した。といつかえー、違ひすぎないかこ  
れ。空黄色って。しかも、レモンの身みたいな薄い黄色じやなくて、  
レモンの皮ぐらい濃い黄色。辺りを見回す。ベンチに座つて談笑す  
る学生たち。キャッチボールする学生たち。芝生に寝転がる学生た  
ち。誰も空のことなんて気にしてない。えー。どうか、これがパラ  
レル。そうかそうか。元の世界とは違うんだ。どうか。うん。自分  
の気持ちを落ち着かせる。と。

一つ、考へが浮かんだ。

\* \* \*

食堂まで一直線、走る。

一人、黙々とカレーを食べている遅村の姿を見つける。  
駆け寄る。向かいの椅子に座る。  
呼吸を落ち着ける。

「……や、遅村。元氣？」

遅村は、こくん、と頷いた。それを見て僕は、ちょっとだけ期待  
が高まつた。  
僕の考へ。

もしかしたら、こっちの世界の遅村は、彼女が逮捕されてないとか、そういうことあるんじゃないか。ヘロインやつてないとか、あるんじゃないか。あるとしたらその彼女を、ここから元の世界に連れて帰れば、元の世界の遅村と一緒にこの世界の彼女が元の世界で元の生活を……うわー自分で考えててややこしい。

けどまあ、とにかく、うん、そんな感じ。僕ってなんて友達想い、さつそく確認してみるべく、すつ、と息を大きく吸い、

「遅村、彼女、元気？」

と、明るく言つて気づいたけど、結構ぞつくりした探しの入れ方してしまった。遅村はきょとん、とした顔で、

「元気だよ」

おお。

これは。

と、遅村が続けて、

「ヘロインやつてるから」と、遅村が続けるから

えー。

知つてんのか。この世界の遅村はそれを。

と、前のテーブルに並んで座る女子の話し声が聞こえてくる。カップの飲み物を飲まされてる女子と、飲ませてる女子。

「落ち着いた？」

「うん、落ち着いた。カフェインつてすげーねー真野」

「うん、ヘロインね耳岸。カフェインもすげーけどね確かに「えー。ヘロイン飲んでんのこの世界の女子は。え? 合法?」

「遅村、ヘロインつて合法?」

「はあ? なに言つてんだお前」

「ドラッグじゃないの? ヘロインは

「ドラッグなんて味の素だけだろ

えー。駄目だこの世界。

と、遅村がカレーを食べながら喋りだす。

「そうそう次ノ宮。あのな、りづめがさ、ちくわ育てるんだけど、

一鉢いらないか？ ちょっと大きくなりすぎちゃって  
えー。その設定は元の世界と変わらないんだー、むしろ育てたら  
ちくわマジで大きくなっちゃうんだー、怖。うん。よし。  
ちょっと、別の世界、行こう。

僕は立ち上がり、最寄のコンセントを探した。

\* \* \*

空の色は、緑。

一人、黙々とカレーを食べている遅村の姿を見つける。

駆け寄る。向かいの椅子に座る。

呼吸を落ち着ける。

「……や、遅村。元気？」

遅村は、こくん、と頷いた。よし。ここまでは一緒に。次だ。

「遅村、彼女、元氣？」

「元気だよ」

お。

どうだ。

「マリファナやってるから」

うわー。だめだ。ヘロインじゃないけどやつてる意味は同じ。  
と、前のテーブルに並んで座る女子の話し声が聞こえてくる。

「落ち着いた？」

「うん、落ち着いた。マリファナつてすげーねー真野

「うん、バファリンね耳鼻。マリファナも半分は優しいで出来る  
けどね確かに」

出来てないよ。怖いよ。なんだかこの世界も駄目くさい。出来る  
限り僕が元いた世界に近いところに行かない。立ち上がる僕に、  
遅村が、

「そろそろ次ノ宮。あのな、りづめがさ、拾ってきたちくわの子供  
育てるんだけど、いるの？ ちょっと大きくなりすぎちゃつ

て「怖いよ。なんだよ拾つてきたって、生きてんのか大きくなるのか。  
想像すると夢に出でやうなので何も考えないよ」しながらコンセントに向かつ。

\* \* \*

空の色は、モスグリーン。

一人、黙々とカレーを食べている遅村の姿を見つける。  
駆け寄る。向かいの椅子に座る。

呼吸を落ち着ける。

「……や、遅村。元気？」

遅村は、こくん、と頷いた。よし。次。

「遅村、彼女、元気？」

「彼女はお前だろ」「え。

「なにそれどうこり意味」

「どういう意味ってそのまんまだる。なんだよ、もつ」

「いやいやはにかんでないで詳しく述べ」

「いやだから、ほら、夏。お前モロッコ行つて女になつてきただろ、  
それで、なんだ……俺、あれ、可愛いな、と思つちゃつて、それで……告つて、うん、そんな感じ」

これもう全然ダメだ。まず遅村の彼女がりづめちゃんじやない時  
点でダメだし、ちょっと頬染めてはにかんでる遅村が生理的にダメ  
だ。

と、前のテーブルに並んで座る女子の話し声が聞こえてくる。

「落ち着いた？」

「うん、落ち着いた。ヘロインつてすげーね」  
「ね、ヘロインつてすげーね  
えー。ほんとにヘロインやってるの。

「そうそう次ノ富。あのな、ちくわがさ」  
とか言い出した遅村を尻田にさっさと立ち上がり、僕はコンセン  
トに向かう。

\* \* \*

空の色は、黄緑。

一人、黙々とカレーを食べている遅村の姿を見つける。

駆け寄る。向かいの椅子に座る。

呼吸を落ち着ける。

「……や、遅村。元気？」

遅村は、こくん、と頷いた。よし。次。

「遅村、彼女、元気？」

「死んだ」

え。

「さつき死んだ。うん、そんな感じ」

『うん、そんな感じ』じゃないよ、と思いながら僕は、  
「ああ、うん、そう」とぬるぬる相槌を打ちながら立ち上がり、口  
ンセントに向かう。

「そうそうちくわ富。あのな」

とか声が聞こえてきて、えーついに僕がちくわに、と思いながら  
ホワイトアウト。

\* \* \*

空の色は、深緑。

一人、黙々とカレーを食べている遅村の姿を見つける。

駆け寄る。向かいの椅子に座る。

呼吸を落ち着ける。

「……や、遅村。元気？」

遅村は、がたん、と椅子から転げ落ちた。

「え」

慌てて立ち上がり、近寄る。だらしなく口を開けて大の字に寝る遅村。瞳孔が完全に開いてる。

えー。死んでる。なんで？ カレーがますすぎたから？ 一目散にコンセントに向かう僕。ホワイトアウト。

\* \* \*

空の色は、うぐいす色。

一人、黙々とカレーを食べている遅村の姿が見つからない。  
えー。いないのか。うーん。

次行こう。

コンセントに向かう僕。ホワイトアウト。

\* \* \*

空の色は、エメラルドグリーン。

学食がない。

えー。根本の根本が。

校舎に入り、近くの教室のコンセントに向かう。ホワイトアウト。

\* \* \*

僕は、何度も何度も、何度も何度も何度もホワイトアウトを繰り返しながら、ぼんやりと思っていた。

これ、くじ引きみたいなもんだなあ、と。

当たりが出るまで根気よく、粘り続けるしかないなあ、と。  
でも。

さすがにちよつとくじけてきた。

空の色は、黄色。

一人、じつと座っている遅村の姿を見つける。

駆け寄る。向かいの椅子に座る。

呼吸を落ち着ける。落ち着かない。

落ち着ける。落ち着かせる。

「（……おい、次ノ宮。元気？）」

逆に訊かれた。僕は、「こくん」と頷くとして、でも、頷けなかつた。正直、元気じゃない。うん。今まで我慢してたけど、コンセントに銅線突っ込んで感電するの、あれ結構きつい。きついというか、自殺だし普通に。ため息をつきながらテーブルに突っ伏す。もう僕、何回感電したんだろう。確実に三桁いつてると思つ。意識するに更にどつと疲れてくる。

「（そぞろ次ノ宮。あのな、りづめがさ、ちくわ）」

もう今日、何度もわからぬ彼女とちくわの話がすっと頭の中を流れていくのを感じながら、僕は遅村を見つめ、問いかける。

「遅村……彼女のことを、好き？」

きょとんとする遅村。

「（なんだよお前、急に）」

「いいから」

僕が問い合わせると、遅村は少し俯き、頭をぽりぽりと搔きながら、

「（うん……好きだよ）」

なんていうか。

すぐ、まっすぐな返事だった。

僕は目の前の遅村を見つめながら、元の世界の、僕の目の前でわんわん大泣きした遅村のことを思い出していた。遅村が言つた言葉。遅村の表情。

ああー。

僕つて、なんて友達想い。……うん、そんな感じ。

ふんつ、と氣合を入れる。氣合を入れて、前を見て、明るく。

「や、遅村。元氣？」

「（は？ なんだよお前にきなり）」「いいから。元氣？」

遅村は、不思議そうな顔で、「くん、と頷いた。

「遅村、彼女、元氣？」

「（元氣だけど？）」

「うん、そつか。うん。じゃあもう一個。ドラッグは、違法？」

「（脈絡ないなお前、どうしたんだよ）」「いいから答えて。違法？」

「（当たり前だろ）」「（当たり前だろ）」「（当たり前だろ）」「（当たり前だろ）」「（カフュインだろ）」「SFはなんの略？」

「（サイエンス・フィクションだる）」「（じゃあ、ちょっと失礼なこと訊っちゃうかもだけど、彼女は、ヘロインやつて務所エヌしてる？」「（あん、さすがにそういう意味のわからない悪趣味な[冗談は、怒るぞ、俺も]）」「（うん、じめん。……じゃあ、ドラッグ、やってないんだね？」「（やつてるわけないだろ）」「（うん、ごめんなさい）」

ど、共に、視界がホワイトアウト　頭部に、重い重い痛み。

「……つたあ、遅村、いくらなんでも殴らなくとも」

「（あのな、さすがにそういう意味のわからない悪趣味な[冗談は、

怒るぞ、俺も]）

「うん、じめん。……じゃあ、ドラッグ、やってないんだね？」「（やつてるわけないだろ）」

「（うん、ごめんなさい）」

ああ目がちかちかする。でも、とりあえず良かつた。頭を撫でながら胸を撫で下ろす。…………あれ？ といふか。

これ、もしかして。

「遅村、ごめん、最後の質問、いいかな」

「（なんだよ）」

「僕、ちくわを、鉢植えに挿して育てるんだがさ……」  
「意味がつかない」

意味がわからん

あ。

10

二〇

かたんと勢よく立ち上がり、思わず遅村の両手を握る。握手

「やつた！ 遅村やつた！ ありがとう！」 うん、 そんな感じ！」

（なんだよお次ノ富 おい 聴すかしいか）やめN!!」

「（なんだよ意味わかんなーな。いや、まあ別ハナダ）

「あつがと/or-」

一  
七

ついに辿り着いた。一番、元の世界に近い、バラレルに。いやもう、近いというか、ほとんど全部、元の世界と一緒に。完璧だ。完璧。自然と顔がほころんでしまう。僕はゆっくり椅子に座る。考える。

たつた一つだけ。

それと

近村は口がないこと

週刊にて、「かぐね」と学食内を巡回する限り、みんなに

て、ゆで卵みたいにつるんとしている。どうしようかなあ、と少し考える。元の世界の遅村、さすがに彼女の口がなかつたら、惑つかなあ。不便かも知れない。悩む。もう一回、別の世界へ飛んでみようか迷う。いやでも、今いふじいが一番ベストかも知れない。ここを逃したら、これ以上のものにもう会えないかも。考えれば考えるほどわからなくなる。とりあえず、ずっと気になつてたことを、目

の前の口のない遅村に訊く。

「あのせ、セつきから喋つてるのは、あれテレパシー？」

「（なんだよお前いまさら）」

テレパシー使えるんだ。便利だなあとちょっと羨ましくさえ思つてしまつ。SF研的視点で見るともうそれは憧れの対象だ。自分の鼻の下を手でそつと触れてみる。もちろん僕には口はある。この世界でおそらく唯一の口保持者。でもどうだ。そんな仲間はずれの僕を見ても、別に驚いたり変な目で見たりしない遅村、の態度から察するに、この世界の人間は懐が広い。いいじyan。むしろいいじyan。もういいじyan。もういいや。うん。

よし決定。

\* \* \*

そういうわけで、今、遅村は、口のない彼女と仲良く暮らしている。元の世界に戻るまで、僕はまたプラスうん百くらい感電したけど、まあ、いい。これが友達想いだ。うん、そんな感じ。

ちなみに刑務所にいる口があるほつの彼女は、まあ、出所したら感電させて別のパラレルに送っちゃえといかなあ、と思つてる。人間万事なんとやら。うん、そんな感じ。

「……なるほど、そんな感じか。うん。お疲れ極まれり」

僕が喋るパラレル冒険記の一部始終を、壁に（真っ黒の壁の上に修正液で）書き連ね終えて、トイさんが振り返つた。

「それで次ノ宮、パラレルやきそばどうなつた」

「あ」

(後書き)

「UE」「ドラッグ」「ちくわを植木鉢にさす乙女」というお題で書いたらこんな感じになりました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8873t/>

ドラッグ、ちくわ、コンセント、並行世界、うん、そんな感じ。

2011年6月7日00時14分発行